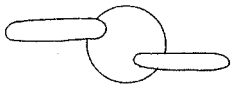
公民館の図書室は　学びの入口・みんなの本棚

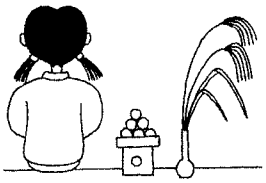
図書室月報

2022年（令和4年）10月5日
第713号

国立市中1－15－1
TEL.042-572-5141
FAX.042-573-0480
国立市公民館

〈図書室のつどい 参加者の感想〉





青木直己著『美しい和菓子の図鑑』「和菓子の歴史と魅力」を受講して

石川 千尋

錦秋の昭和記念公園。紅葉が湖面彩る日本庭園。茶室を訪れた人は一服のお茶をいただく。添えられた和菓子は東京都昭島市の和菓子屋が製造。東京都で唯一天然地下水100％の昭島市の水。良質な水で作られた美味しい和菓子。人はゆっくりと喫茶を愉しんでいる。

私の実家は昭島市にある。子どもの頃、お墓参りの後、実家に立ち寄ると、ある時はお萩が、また、ある時は大きな湯気立ち上がっている酒まんじゅうが、大皿に山盛りなっていた。良質な水で炊いた餡。色が濃く、柔らかな皮、舌ざわり良い小倉餡が私を和菓子の大ファンにさせたのかも知れない。

今回、虎屋で永らく研究をつづけられた青木直己先生の講演は私にとって忘れられない講演の一つとなった。近ごろの和菓子は甘くて口当たりが良くて、宣伝上手で機械で大量に作って、名の通ったデパートでいつでも買える。次第に飽きてきた。おまけに商品が次から次へと出てくるものだから、可哀そうに店員さんもうまく説明できない。益々和菓子売り場へは行かなくなる。ところが、先生が撮ったスライド。印象的だった京都今宮神社参道の二軒のあぶり餅屋。先生は店員さんと目が合った方の店で買うという。このお話で一流の和菓子が京都にあると確信する。講演は京都に時間を多くとっていた。和菓子といえば京都。くにたち図書館司書に京都の和菓子の本を探してもらうと『京菓子』『京菓子の話』『カラー京都の菓子』『京・銘菓案内』『和菓子の京都』『京都和菓子めぐり』と数多く出版されている。図書館に二冊の所蔵があった。一冊は岩波新書川端道喜著『和菓子の京都』。京菓子の章では、京菓子が横綱クラスの看板を張ることができた理由として、丹波・亀岡など近在で比較的いい材料が手に入るからと。神社・仏閣、茶の湯の家元の住居があり、得意先がいっぱいあることで菓子屋が競争し、質的向上につながっていったと書いてある。一冊は『京都和菓子めぐり』。約80軒の京都和菓子屋の紹介が載る。創業文化元年（1804）の老舗、亀末廣の丹波大納言の餡に見惚れる。収穫後、よく吟味した小豆を使うため12月からの季節限定とのこと。

更に図書館で餡について調べ、丹波大納言の項で京都・亀岡市の馬路大納言を見つける。希少で日本一の小豆、畑の宝石とも称される小豆（吉兆の故湯木貞一氏もおいしい豆と高く評価）。「京都に行かねば食べられないか」と思っていた矢先、思いがけなくも、ある京都の老舗が6月29日30日限定で京都発祥の和菓子水無月を都内百貨店で発売し、餡がぜいたくな馬路大納言と聞く。HPには掲載なしの滅多に食べられない和菓子。すぐに和菓子好きの友人・知人に紹介する。立川伊勢丹では「2日前までに連絡もらえれば」とも伝えていたが、予約殺到のため、「買えなかったー」と友から電話が入った。

最近、JR山陰本線亀岡駅構内の観光案内所で馬路大納言の逸品最中が年間通して買えるようになった。また、1月に製造店に行けば新豆の小豆を炊いた出来立ての最中が食べられるという。

十三夜の今月。デパ地下は栗菓子のオンパレード。栗鹿の子、栗羊羹、栗最中、栗饅頭、栗きんとん、栗の粉餅とつづく。思い出すのが栗菓子専門店並ぶ長野県小布施町。味に個性を発揮しないと脱落する。新栗15個を使う小布施堂の人気点心朱雀。昨年、この季節に食べに行く。食べている人皆幸せそう。店の人「お客さんいい時来ましたね。今、栗が熟して風味豊かなんです。」

青木先生の和菓子の旅にご一緒される奥様も、幸せなひとときを過ごしていることでしょう。ご講演を拝聴して、一流の和菓子に目がなくなりそうです。　（二見書房）

〈図書室のつどい 参加者の感想〉

田島木綿子（ゆうこ）著『海獣学者、クジラを解剖する』を受講して

今村 三郎

我々にとってクジラというのは、だいぶ昔、給食のおかずとして食べた記憶がある、懐かしい言葉です。今は捕鯨禁止になり、めったに食べることがなくなりました。そのクジラを解剖するって何のために？また「ストランディング」という聞きなれない言葉が書かれているけど、何だろう？なんとなく家にあった、公民館からのお知らせを見ました。この３月で仕事を卒業して、ひまになったし、行ってみようか、そう思ったのが講演会に参加するきっかけでした。

講演者は国立科学博物館の田島木綿子先生。国立は前職の先生もいらしたということでなじみがあるそうです。専門の論文・著作も多く、クジラに関するニュースではよくコメントを求められる有名な獣医師だそうです。

クジラは海に戻った哺乳類といえるのだそうです。そこから先生の講演は始まりました。海に戻ったとはどういうことでしょう？先生は、はじめにクジラは我々人間と同じ哺乳類ということを詳しく説明されました。ことばのとおり、こどもを哺乳すること、胎盤を持ち胎生であることはもちろんです。解剖学的には呼吸の仕方、骨のしくみから耳鼻口の類似性まで話されました。

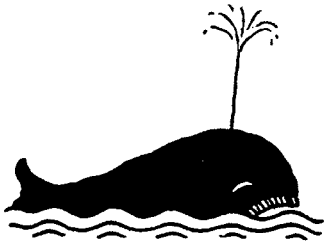
講演のテーマである、「ストランディング」とは普段は水中で暮らしている彼らが自ら陸に乗り上げてしまうことを指します。現在日本では１年に３００件が報告されています。同じ海に囲まれているイギリスでも６００件だそうですから、世界的な事象ということが言えます。なぜ自ら陸に乗り上げ、亡くなってしまうのか。その原因を明らかにするのが先生の研究です。

原因として考えられるのは、病気、事故・混獲があります。先生は獣医師であることから、その中で病気が原因でないかと考え、「ストランディング」したクジラの解剖にとりくんでいます。そのうち、注目されているのが、プラスチックごみです。海の中のごみを食べてしまうのです。実際解剖すると内臓にそれらの破片が観察されました。これにより免疫低下を起こし、病気にかかりやすくなることが考えられます。海ごみの70％は川からのものであること、すなわち我々の生活ごみが、その一部になっているのです。強調されていたのはプラスチックごみは紫外線にあたったりすることで小片になっても目にできるが、もっと大事なのはダイオキシンやPCBなど残留性の高い有機汚染物質POPs（Persistent Organic Pollutants）は目に見えないことです。

若いころ公害問題が大きくなりました。水俣病・イタイイタイ病の原因として有機水銀化合物だと明らかになったのです。私も化学を学び、研究開発に従事した経験があります。プラスチックや化合物が人類の文化に大きな貢献をしたのも事実ですが、複雑な気持ちでした。子供・孫また今後の子孫にとって考えるべき問題と思います。早急にこれからの対策まで明らかになってもらいたいと思います。

哺乳動物の中でもカバはあのようにユーモラスな感じですね。でもライオンより獰猛な動物といわれます。先生によると実はクジラと近縁で、一番クジラに戻れる動物だそうです。それでは人間は（私は）どうなのでしょう？

（山と渓谷社）



くにたちブッククラブ

―感傷から遠く離れて―

田中康夫
『33年後のなんとなく、クリスタル』（河出文庫）

講　師　深津謙一郎
（共立女子大学・日本近代文学）

と　き　10月13日（木）
夜7時半～9時半

ところ　公民館 地下ホール

申込先　公民館 ☎（572）5141

＊次回は11月10日（木）
奥泉光『東京自叙伝』
（集英社文庫）です。

新着図書から

〈総記〉

ゆっくり学ぶ　岸見一郎（集英社クリエイティブ）　002
国際報道を問いなおす　杉田弘毅（筑摩書房）　070
調査報道記者　日野行介（日野行介）　070

〈歴史〉

この国の戦争　奥泉光（河出書房新社）　210
沖縄「格差・差別」を追う　羽原清雅（書肆侃侃房）　219
日本人として知っておきたい琉球・沖縄史　原口泉（ＰＨＰ研究所）　219
沖縄（シマ）という窓　山城紀子（岩波書店）　219
亜鉛の少年たち　スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチ（岩波書店）　227
民衆史の狼火を　三木健編（不二出版）　289

〈社会科学〉

現代ホンジュラスを知るための55章　中原篤史編著（明石書店）　302
フィンランド幸せのメソッド　堀内都喜子（集英社）　302
職業としての官僚　嶋田博子（岩波書店）　317
世界の賢人12人が見たウクライナの未来　クーリエ・ジャポン編（講談社）　319
プーチンの運命　落合恵美子（勁草書房）　361
近代家族とフェミニズム　部落の私たちがリモートで好き勝手にしゃべってみた。　部落解放・人権研究所編（部落解放・人権研究所）　361
協力のテクノロジー　松原明（学芸出版社）　361
満洲からシベリア抑留へ　生田美智子（人文書院）　367
女子サッカー選手です。そして、彼女がいます　下山田志帆（偕成社）　367
むずかしい女性が変えてきた　ヘレン・ルイス（みすず書房）　367
「少女」の社会史　今田絵里香（勁草書房）　367
ポルノ被害の声を聞く　ぱっぷす編（岩波書店）　368
「社会」を扱う新たなモード　飯野由里子（生活書院）　369
障害者たちの太平洋戦争　林雅行（風媒社）　369
日本・アメリカ・フィンランドからみる障害者虐待の実態と構造　増田公香（明石書店）　369
ボランティア活動の責任　溝手康史（共栄書房）　369
子どものための居場所論　阿比留久美（かもがわ出版）　370
いじめ加害者にどう対応するか　斎藤環（岩波書店）　371
日本のしきたり　新谷尚紀監修（出版芸術社）　386
日米地位協定の現場を行く　山本章子（岩波書店）　395

〈自然科学〉

ヒトはなぜ死ぬ運命にあるのか　更科功（新潮社）　461
日本書紀の鳥　山岸哲（京都大学学術出版会）　488
野菜の栄養と食べ方まるわかりＢＯＯＫ　牧野直子（ワン・パブリッシング）　498

〈工業〉

摘んで野草料理　金田初代（創森社）　596
一汁一菜でよいと至るまで　土井善晴（新潮新書）　596
一緒に生きる　東直子（福音館書店）　599

〈産業〉

柚子をさぐる　沢村正義（フレグランスジャーナル社）　625

〈芸術〉

日本アニメ史　津堅信之（中央公論新社）　778

〈文学〉

やりなおし世界文学　津村記久子（新潮社）　904
ことばの杖　李良枝（新泉社）　91イ
よみぐすり　坂口恭平（東京書籍）　91さ
左川ちか全集　左川ちか（書肆侃侃房）　91さ
言葉の還る場所で　谷川俊太郎（春陽堂書店）　91た
島崎藤村短篇集　島崎藤村（岩波書店）　91し
両手にトカレフ　ブレイディみかこ（ポプラ社）　91ブ
今日もごきげんよう　松浦弥太郎（マガジンハウス）　91ま

〈一節〉

沢村正義 著『柚子をさぐる ―ゆずの森より―』

柚子が世界に羽ばたくことができたのは？

一九六五年頃から温州ミカンから雑柑類への転換施策を機に、ユズ、スダチ、カボスなどの香酸柑橘類の生産量は右肩上がりで増加していきました。スダチは徳島県、カボスは大分県とある程度地域が限定されていますが、ユズは北海道を除いて日本のほとんどの地域で栽培可能ですので、それだけ生産量も急速に増大していきました。しかしユズの場合もその十年後には需給バランスが崩れ始めました。

一九八〇年から一九九〇年代にかけては、柚子の加工品への開発が遅れた結果、柚子果汁の消費が伸びず、二年、三年越しの貯蔵果汁が増え、柚子産業の存続が危ぶまれました。このような状況の中で、一九八八年、馬路村農協の「ぽん酢しょうゆゆずの村」が「日本の１０１村展」で最優秀賞を受賞し、全国的な話題となりました。このポン酢は従来市販されていたポン酢の常識を覆すもので、柚子果汁の使用割合を格段に高くしたものでした。醸造酢の風味を打ち消して柚子の風味を前面に押し出すことによって、忘れかけていた日本人の柚子の味覚を呼び覚ました瞬間と言えましょう。柚子果汁の酸味と香りが日本人の好みと和食に合致することが見直され始めたのです。さらにこの二年後、馬路村農協は「ごっくん馬路村」という柚子はちみつ飲料を開発して大ブレークさせました。

（フレグランスジャーナル社）

講座参考図書

地域で社会問題を解決する方法　～コミュニティ・オーガナイジング入門～

講師　藤井敦史（立教大学）

＊社会はこうやって変える！ ―コミュニティ・オーガナイジング入門― ……藤井敦史（法律文化社）
＊社会的連帯経済 ―地域で社会のつながりをつくり直す― ……藤井敦史編著（彩流社）
＊コミュニティ・オーガナイジング ―ほしい未来をみんなで創る5つのステップ……　鎌田華乃子（英治出版）
＊社会的連帯経済入門 ―みんなが幸せに生活できる経済システムとは― ……　廣田裕之（集広舎）
＊協力のテクノロジー ―関係者の相利をはかるマネジメント― ……松原明・大社充（学芸出版社）

母と娘のむずかしさ　～20～40代・子育て世代の女性に向けて～

講師　大美賀直子（メンタルケア・コンサルタント、公認心理師、精神保健福祉士）

＊長女はなぜ「母の呪文」を消せないのか ……　大美賀直子（さくら舎）
＊大人になっても思春期な女子たち……　大美賀直子（青春出版社）
＊母と娘はなぜ対立するのか ―女性をとりまく家族と社会― ……　阿古真理（筑摩書房）
＊逃げたい娘　諦めない母 ……朝倉真弓・信田さよ子（幻冬舎）
＊母と娘はなぜこじれるのか ……　齋藤環ほか（NHK 出版）

〈私の本棚から　第１回〉

小野寺史宜著『ライフ』

吉沢いより

「それでは皆さま、どうぞご歓談ください」と司会者の女性が言う。そんな一文からこの物語は始まります。始まりの一文から、あなたはどのような物語を想像したでしょうか。きっと様々な想像を膨らませていると思います。想像の答え合わせがしたくなった方はもちろん、そうでない方も是非読んでみてください。

今回、「私の本棚から」を書くにあたって読み返しました。そのときに見つけた印象的な一文を紹介します。

「突き動かされた挙句、バックで一気にアクセルを踏み込むようなことがあってはいけないのだと。」

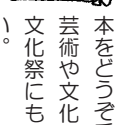
何かに突き動かされたとき、結果がどのように転ぶかはわかりません。良い結果をもたらす場合もあれば、悪い結果をもたらす場合もあります。また、突き動かされた結果、後悔するような結果になったとしても戻ることはできません。だからこそ、後悔するような結果になった時、タイムスリップすることができたらよかったのにと思ったことはありませんか。タイムスリップしてやりなおすことができたなら、何か変わっていたかもしれないのにと考えた経験がある人も多いのではないでしょうか。そんな非日常を求めて何か特別ことが起こる異世界の話を読んだり見たりなんてこともあるかもしれません。今回は異世界の話ではなくあえて普遍的な日常を描いた小説を読んでみませんか。

「ライフ」は、読んだあとに特別なことが起こらない日常もいいなと思える作品になっています。主人公が超能力を持っているわけでもなければ、主人公が誰かと入れ替わるわけでもありません。主人公が過ごすありふれた日常は親近感が湧き、自然と入り込んで読むことができます。劇的な展開がなくてもスムーズに読むことができてしまうのは作者の文章の構成力があるからこそでありこの小説の魅力です。

今まで小説を読んでこなかった方もこれを機に読書のある生活を始めてみませんか。気軽に小説を読みたい方にもおすすめの一冊です。

（ポプラ社）

係から



今月から半年間、「私の本棚から」は吉沢さんが担当してくださいます。次回以降もどうぞお楽しみに。

読書の秋、公民館でお好きな本をどうぞ手に取ってください。芸術や文化の秋、国立市の市民文化祭にもぜひお出かけください。